

# 源氏物語

匂宮

紫式部

青空文庫



春の日の光の名残花ぞのに匂ひ薫ると

思ほゆるかな

(晶子)

光君ひかるきみがおかくれになつたあとに、そのすぐれた美貌びぼうを継ぐと見える人は多くの遺族の中にも求めることが困難であつた。院の陛下はおそれおおくて数に引きたてまつるべきでない。今の帝みかどの第三の宮と、同じ六条院で成長した朱雀院すざくの女三にょさんの宮みやの若君ふたりの二人が、とりどりに美貌の名を取つておいでになつて、實際すぐれた貴公子きこうしでおありになつたが、光源氏みづゑがそうであつたようにまばゆいほどの美男といふのではないようである。ただ普通の人としてはまことにりつぱで艶えんな姿の備わつてゐる方たちである上に、あらゆる条件のそろつた身分でおありになることも、光源氏みづゑにやや過ぎていて、人々の尊敬してゐる心が、實質以上に美なる人、すぐれた人にする傾向があつた。紫夫人むらさきが特に愛してお育てした方であつたから、三の宮は二条の院に住んでおいでになるのである。むろん東宮は特別な方として御大切にあそばすのであるが、帝みかどもお后きさきもこの三の宮を非常にお愛しになつて、御所の中へお住居すまいの御殿も持たせておありになるが、宮はそれよりも気楽な自邸みづみの生活をお

喜びになつて、二条の院におおかたはおいでになるのであつた。御元服後は三の宮を兵部卿の宮と申し上げるのであつた。女一の宮は六条院の南の町の東の対を、昔のとおりに部屋の様変えもあそばされずに住んでおいでになつて、明け暮れ昔の美しい養祖母の女王を恋しがつておいでになつた。二の宮も同じ六条院の寢殿を時々行つてお休みになる所にあそばして、御所では梅壺をお住居に使つておいでになつたが、右大臣の二女をお嫁りになつていた。次の太子に擬せられておいでになる方で、臣下が御尊敬申していることも並み並みでなくて、その御人格も堅実な方であつた。

源右大臣には何人もの令嬢があつて、長女は東宮に侍して、競争者もないよい位置を得ているのである。下の令嬢はまた順序どおりに三の宮がお嫁りになるのであろうと世間も見ているし、中宮もそのお心でおありになるのであるが、兵部卿の宮にそのお心がないのである。恋愛結婚でなければいやであると思つておいでになるふうなのであつた。夕霧の大臣も同じように娘たちを御兄弟の宮方に嫁がせることを世間へはばかっているのであつたが、もし懇望されるなら同意をするのに躊躇はしないというふうを見せて、兵部卿の宮に十分の好意を見せていた。大臣の六女は現在における自信のある貴公子の憧憬の的になつていた。

六条院がおいでにならぬようになってから、夫人がたは皆泣く泣くそれぞれの家へ移つてしまつたのであつて、はなぢるさとし花散里といわれた夫人は遺産として与えられた東の院へ行つたのであつた。中宮は大部分宮中においでになつたから、院の中は寂しく人少なくなつたのを、夕霧の右大臣は、

「昔の人の上で見ても、生きている時に心をこめて作り上げた家が、死後に顧みる者もないような廢邸になつてゐることは、榮枯盛衰を露骨に形に見せてゐる気がしてよろしくないものだから、せめて私一代だけは六条院を荒らさないことにしたいと思う。近くの町が人通りも少なく、寂しくなるようなことはさせたくない」

と言つて、東北の町へあの一条の宮をお移しして、三条の邸やしきと一夜置きに月十五日ずつ正しく分けて泊つてゐた。二条の院と言つて作りみがかれ、六条院の春の御殿と言つて地上の極樂のように言われた玉の台うてなもただ一人の女性の子孫のためになされたものであつたかと思へて、あかし明石夫人は幾人も宮様がたのお世話をして幸福に暮らしてゐた。夕霧はどの夫人に対しても院がお扱いになつたとおりに、皆母として奉仕してゐるのであるが、紫の女王がこんなふう<sup>に</sup>に院のおあとへ残つておいでになれば、どんなに自分は誠意をもつてお尽くしすることであろう、終わりまで特別な自分の好意というものを受けてもらえると

いうようなことはなかつたと思うと、今も大臣は残念でならぬように思うのであつた。

天下の人で六条院をお慕いせぬ者はなくて、何につけても火が消えたように思つて歎かぬおりはないのであつた。まして院に親しくお仕えしていた人たち、夫人がた、宮がたが院にお別れした悲しみに流す涙というものはどれほどの量であるかしれないのである。それとともに今も紫夫人を追慕する思いはだれにもあつて、人からその女王の思い出されていない時というものはないのである。春の花の盛りは短くても印象は深く残るものであるというべきであらう。

二品の宮にほんみやの若君は院が御寄託あそばされたために、冷泉院れいせいの陛下がことにお愛しになつた。院の後の宮も皇子などをお持ちにならずお心細く思召おぼしめしたのであつたから、この人をお世話あそばして老後の力にしたいと望んでおいでになつた。元服の式も院の御所であげられた。十四の歳であつた。その二月に侍従になつて、秋にはもう右近衛うこんえの中將に昇進した。推薦権をお持ちになる位階の陞叙しょうじよもこの人へお加えになつて、なぜそんなにお急ぎになるかと思うようにずんずんと上へお進ませになるのであつた。お住居の御殿に近い対をこの人の曹司ぞうしにおあてになつて、装飾などは院御自身の御意匠でおさせになり、若い女房から童女、下仕えの者までもすぐれた者をお選りよととのえになつた。人が姫君を

かしづく以上の華奢かしやな生活をおさせになるようでもばゆく見えた。院のおそばの女房の中からも、後の宮の女房の中からも容貌ようぼうのすぐれた、感じのよい、品のある女は皆中将の曹司付きにあそばされ、院にすることがどこにいるよりも好きになるようにとお計らいになったのであつて、うれしい玩具品がんぐひんのように思召すのであつた。亡なくなった太政大臣の女御によこの腹からただお一方の内親王がお生まれになったのを、院が非常に珍重あそばすのに変わらず中将をお扱いになるのである。それは一つは後の宮をお愛しになることが年月とともに増してゆくことによるものらしくて、それほどまでにはと話を聞いては人が信じないほど中将を院はお愛しになった。

現在の母宮は仏勤めをばかりしておいでになつて、月ごとの念仏、年に二度の法華ほつげの八講、またそのほかのおりおりの仏事などを怠らずあそばすだけがお役目のようである。出入りする中将をかえつて御自身のほうが子のように頼みにしておいでになつたから、お気の毒でおそばにもいたかつたし、院からも、宮中からも始終お呼ばれはするし、東宮も御弟の宮がたも親友のように思召していっしょにお遊びになろうとされるしするため、暇がななく苦しい中将は一つの身を幾つかに分けて使うことができぬかとさえ歎息たんそくしていた。時々耳にはいつて、子供心にも腑ふに落ちず思つたことは、今も不可解のまままで心に残つてい

るが、尋ねる人もなかった。宮にはそうした不審をいだいているとさえお思われすることのはばかられる問題であったから、ただ自身の心のうちでだけ絶え間なくそのことを考えて、

「どういうことから自分が生まれるようになったのか、何の宿命でこんな煩悶はんもんを負つて自分は人となったのか、善巧ぜんぎょう太子はみずから釈迦しやかの子であることを悟つたというが、そうした知慧ちえがほしい」

と独言ひとりごとをする時もあった。

おぼつかなたれに問はまし如何いかにして始めも果ても知らぬわが身ぞ

返事はだれもしてくれない。自身の健康などもこんなことでそなつてゆくような気がして中将は歎なげかれるのであった。宮がお年の若盛りわかもりに尼ににおなりになったのも、いったいどれほどの信仰しんぎょうがおりになつたために、にわかにわかに出家しんげを断行だんぎょうあそばされたのか、自分の生まれてくることが不祥ふしやうなことであつたために、厭えん世せい的なお気持ちにもなられたのであろう、人がその秘密ひみつを悟さとらずにいるとは思われない、暗闇くらがりに置くべき問題であるから自



分には人が告げないのであろうと中将は思った。朝暮あけくれ仏勤めはしておいでになるようではあるが、確固とした信念がおりになるとは思えない女の悟りだけでは御みほとけ仏の救いの手もおぼつかない、五つの戒めも完全に保っておゆきになれるかも疑問なのであるから、自分がその精神だけを補うことにして、後世だけでも御安楽にしてさしあげたく思った。この人はお崩かくれになった院も、自分というもののために不快な思いにお悩まされになったかもしれないと思うと、次の世界でももう一度お逢あいしたいという望みが起こり、元服して社会へ出ることを厭いとわしがったのであるが、意志を通すこともできなくて、出仕する身になった時から、八方のはなやかな勢いがこの人を飾ることになっても、これはうれしいとは思われないで、ただ静かな落ち着いた人になっていた。帝も母宮の御縁故でこの中将に深い愛をお持ちになったし、中宮はもとより同じ院内で御自身の宮たちといっしょおに生おい立って、いっしょにお遊ばせになったところのお扱いをお変えにならなかつた。

「末に生まれてかわいそうな子です。一人前になるまでを自分が見てやることもできない」と、院が仰せられたことをお思いになつて、憐あわれみを深くかけておいでになるのである。夕霧の右大臣も自身の公きんだち達よりもこの人を秘蔵がって丁寧ていねいに扱うのであつた。昔の光源氏は帝王の無二の御愛子ではあつたが、嫉妬しつとする反対派があつたり、母方の保護者がなか

つたりして、聡明な資質から遠慮深く世の中に臨んでおいでになつて、一世の騷乱にな  
りかねぬようなことになつた時も、いさぎよく自身で渦中を去り、宗教を深く信じて冷  
静に百年の計をされたのである。この中将は若年ですでにあらゆる条件のそろつた恵まれ  
た環境に置かれていた。そしてそれに相当した優秀な男子でもあるのである。仏が仮に人  
として出現されたかと思われるところがこの人にあつた。容貌もどこが最も美しいとい  
うところはなくて、目を驚かすものもないが、ただ艶で貴人らしくて、賢明らしいところ  
が万人に異なつているのである。この世のものとも思われぬ高尚な香を身体に持つて  
いるのが最も特異な点である。遠くにいてさえこの人の追い風は人を驚かすのであつた。  
これほどの身分の人が風采をかまわずにありのままで人中へ出るわけはなく、少しでも  
人よりすぐれた印象を与えたいという用意はするはずであるが、怪しいほど放散するにお  
いに忍び歩きをするのも不自由なのをうるさがつて、あまり薫香などは用いない。それ  
でもこの人の家に蔵われた薫香が異なつた高雅な香の添うものになり、庭の花の木もこ  
の人の袖が触れるために、春雨の降る日の枝の雫も身にしむ香を放つことになつた。秋の  
野のだれでもない藤袴はこの人が通ればもとの香が隠れてなつかしい香に変わるの  
であつた。こんな不思議な清香の備わつた人である点を兵部卿の宮は他のことより

もうらやましく思おぼしめ召して、競争心をお燃やしになることになった。宮のは人工的にすぐれた薫香をお召し物へお焚たきしめになるのを朝夕のお仕事にあそばし、御自邸の庭にも春の花は梅を主にして、秋は人の愛する女おみなえし郎花、小男鹿さおしかのつまにする萩はぎの花などはお顧みにならずに、不老の菊、衰えてゆく藤袴、見ばえのせぬ吾木香われもこうなどという香のあるものを霜枯れのころまでもお愛し続けになるような風流をしておいでになるのであった。昔の光源氏はこうしたかたよつたことはされなかつたものである。

源中将は始終宮の二条の院へお伺いするのであつて、音楽の遊びの行なわれる時にも優越を誇るような笛の音を吹き立てる相手を、互いに好敵手と認める若いどうしであつた。世間も黙つてはいなかつた。匂におう兵部卿、薫かおる中将とやかましく言つて、すぐれた娘を持つ貴族たちはこの貴公子たちを婿に擬して、好奇心の起こるようにしむける者もあるのを、宮は相手の女の価値を相当なものと考えられる人へは手紙を送つてごらんになつて、なお細かく相手を観察しようと思はれるのであつた。しかも熱心にだれを得なければならぬと思ひになる女はなかつた。冷れいぜい泉院いづみいんの女にょいち一みやの宮と結婚ができたらうれいであろうと匂にお宮みやがお思ひになるのは、母君の女御も人格のりっぱな尊敬すべき才女であつて、姫君もさもあるはずにすぐれた評判をとつておいでになる方だからである。遠くからの評判だ

けではなく匂宮は姫宮のおそばにいる女房から細かな御様子を聞いてもおおいでになるのであつたから、忍びがたく恋のようにも今ではなつていた。

中将は人生を味気ないものと悟つているのであるから、寂しいからといって、恋愛などをしては、かえつてこの世を捨てる際の妨げになるであろうということを知つていて、保護者との関係の煩瑣はんさな女性に求婚するようなことははばかられるのであつた。自身では永久にこの冷静な態度が続けられるものと思つていたであろうが、それはただ現在の薫中将が熱情をもつて愛する人がないからであろうと思われる。親兄弟の同意せぬ恋愛結婚などはまして遂行すべくもない薫である。十九になつた歳としに三位の参議になつて、なお中将も兼ねていた。帝も後も愛を傾けておいでになる人で、臣下としてこれ以上幸福な存在はないと見られる薫ではあるが、心の中には純粹な六条院の御子と思われぬ不幸な認識がひそんでいて、樂天的にはなれない人で、貴公子に共通な放縱な生活をするようなことも好まなかつた。静かに落ち着いたものの見方をする老成なふうの男であると人からも見られていた。兵部卿の宮の恋が年とともに態度の加わる院の一品いっほんの姫宮も、一つの院の中にいる薫には、ことに触れて御様子がわかりもするのであつて、評判どおりに優秀な御素質の貴女らしいことを知つては、こんな方を妻にできれば生きがいを感じることであらうと思

うのであるが、院が御実子同然な御待遇を薫に与えておいでになるもの、姫宮との間だけは嚴重にお隔てになるのを知つては、しいて御交際を求めにゆく気にはなれないのであつた。自分ながらも予期せぬ恋の初めの路に踏み入るようなことがもしあつては、宮のためにも、自身のためにもよろしくないと思つて、親しもうとは心がけなかつた。

人に愛さるべく作られたような風采のある薫であつたから、かりそめの戯れを言いかけたにすぎない女からも皆好意を持たれて、やむなく情人關係になつたような、まじめには愛人と認めていない相手も多くなつたが、女のためには秘密にするほうがよいと思つて、皆蔭のことにしておいて、無情だと思われぬ程度にだれの所へも人目を紛らして通つて行くのを、女のほうではかえつて気が詰まるように苦しく思い、薫の誘うままに三条の母宮の所へ女房勤めに集まつて来るのが多くなつた。冷淡な態度を始終見せられているのも苦痛ではあつたが、絶縁されるよりはと心細い恋人たちは思つて、女房勤めをする身分でない人々もこうして薫とはかない關係を続けることで慰んでいたのであつた。さすがになつかしい、目に見るだけでも情感を受けられる人であつたから、どの女もしいてみずからを欺くようにしてこの境遇に満足していた。

「宮様の御存命中は毎日お目にかかることを怠らないつもりだから」

と薫中将は言っていた。こんなふうの人であつたから、夕霧の右大臣もおおぜいある娘の中の一人は匂宮へ、一人はこの人の妻にさせたいという希望は持つていても、言いだすことをはばかつていた。なんといつても内輪どうしのことであつて、世間の聞こえもおもしろくないとは大臣も知つているのであるが、この二人のすぐれた貴公子に準じて見るほどの人もない世の中ではしかたがないと考えられるのであつた。雲井くもいの雁夫人かりの生んだ娘たちよりも藤典侍とうてんじにできた六女はすぐれて美しく、性質も欠点のない令嬢なのであつた。劣つた母に生まれた子として世間が軽蔑けいべつして見ることを惜しく思つて、女二の宮が子供をお持ちになることができずに寂しい御様子であるために、六の君を大臣は典侍の所から迎えて宮の御養女に差し上げた。よい機会に二人の公子に姫君の気配けはいをそれとなく示したなら、必ず熱心な求婚者になしうるのであるう、すぐれた女の価値を知ること、すぐれた男でなければできぬはずであると大臣は思つて、六の君を後の候補者というような大おお形うな扱いをせず、はなやかに、人目を引くような派手はでな扱いをして貴公子の心を多く惹ひくようにしていた。

御所の正月の弓の競技のあとで、左大将でもある夕霧の大臣の家で宴会の開かれるのを、大臣は六条院ですることにして匂宮にも御来会を願つていた。賭かけ弓ゆみの席には皇子がたの

御元服あそばしたのは皆出ておいでになつた。后きごぎばら腹はらの宮は皆けだか気高くお美しい中にも、風流男みやびおの名を取つておいでになる兵部卿の宮はやはりすぐれて御風ふうさき采さいがりつぱにお見えになつた。第四の皇子は常陸ひたちの太守でありになるが、この方は更衣腹こういばらで、思いなしかずつと見劣りがされた。例のことであるが勝負は左ばかりが勝ち続けた。例年よりも早く競技は終わつて左右の大將は退出するのであつたが、匂宮、常陸の宮、后腹の五の宮を大臣の大將は自身の車へいっしょにお乗せして帰ろうとした。薫は負け方の右中將で、そつと退出して行こうとしていた車を、大臣は、

「宮様がたがおいでになるお送りにおいでにならないか」

と言つてとどめさせて、子息の衛門督えもんのかみ、権中納言ごん、右大弁そのほかの高官をそれへ混ぜて乗せさせて六条院へ来た。

やや遠い路みちを来るうちに雪も少し降り出して艶えんな氣きのする黄昏時たそがれどきであつた。笛などもおもしろく吹き立ててはいつて行つた。六条院は、ここ以外にはどんな御み仏ほとけの国でもこゝうした日の遊び場所に適した所はないであらうと思われた。寝殿の南の庇ひさしの間の端に定例どおり中將が南向いて席につき、北向きに主人の座に対して来会者の親王がた、高官たちの席が作つてあつた。酒杯が出て夜がおもしろくなつたところに「求もとめこ子」が舞われた。左

の手で抑え、右の手で抑えて幾度か袖を斜めにするこの時の風の動きに庭の梅の香がさつと家の中へはいってきて、源中将が身に持つにおいを誘うのも艶な趣のあることであつた。わずかな透き間からのぞく女房なども、

「闇はあやなし（梅の花色こそ見えね香やは隠るる）」という時間にもあの方のにおいだけはだれにだつてわかります」

と言つて薫をほめていた。大臣もそう思つていた。容貌も風采も平生以上にまたすぐれて見える薫が行儀正しく坐しているのを見て、

「右近衛の中将も声をお加えなさい。あまりに客らしくしているではありませんか」

と言うと、感じのよいほどの中音で、「神のます」など、求子の一ふしをうたつた。



# 青空文庫情報

底本：「全訳源氏物語 下巻」角川文庫、角川書店

1972（昭和47）年2月25日改版初版発行

1995（平成7）年5月30日40版発行

※このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp/>) で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

※校正には、2002（平成14）年4月10日4版を使用しました。

※「一品」のルビは底本では「いっぼん」となっていました。が、「匂宮」以外の作品では「いっぼん」で統一されていましたので直しました。

入力：上田英代

校正：高橋真也

2003年8月12日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 源氏物語

## 匂宮

2020年 7月18日 初版

### 奥付

発行 青空文庫

著者 紫式部

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>